

## 『ツァラトウストラの序説』について

株 丹 洋 一

以前あなたに言ったことがあると思いますが、ワーグナーは私の中に、隠れた悲劇作家を見ていたのです。

「ツァラトウストラ」第2部を完成した後の1883年9月3日、ペーター・ガストあての手紙の中で、ニーチェはこのように語っている。「ツァラトウストラ」の冒頭に置かれてある「序説」は、その様式において、その後続く同じ第1部中の「言説」とは、明確に区別されるものである。しかも、アルトゥール・パイファーによれば、「序説」の様式は「言説」のそれよりも、戯曲的特徴を持つ「ツァラトウストラの草稿」の様式に近いと言う。<sup>1)</sup> そこで本稿では、代表的戯曲論の1つとされているフライタークの「戯曲の技巧」に基づいて、<sup>2)</sup>「序説」の構造を探って見たい。

## 註

- 1 Arthur Pfeiffer, Die Rollen des Zarathustra, Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 18, 1940, S. 73.
- 2 フライターク (島村民蔵訳), 「戯曲の技巧」, 岩波文庫。  
フライタークはこの書の中で、戯曲の構造としての5部分 (発端, 上昇, 頂点, 降下, 段落) と, 3場所 (刺激的動機, 悲劇的動機, 最後の緊張の動機) を説いている。S. 134ff..

## I

第1節は発端 (Exposition) である。この節は2つの部分から構成されている。すなわち、作品の前提を説明する冒頭部分と、序説の主題を表明するその後続く部分とからである。

第1の部分は作品の導入部であり、次のように述べられている。

ツァラトウストラは30歳の時、故郷と故郷の湖を去って、山にはいった。ここで彼はみずからの精神と孤独をたのしみ、10年間それに飽きなかった。しかし、ついに彼の心は変わった。<sup>1) 2)</sup>

ツァラトウストラが30歳の時、故郷と故郷の湖を捨てて山にはいったのは、なぜであろうか。このことについて次の第2節では、その時ツァラトウストラは「みずからの灰を山に運んだ」と語られており、第1部の「背後世界者について」の章では更に、「わたしは、自分に、苦悩するものに打ち勝った。わたしは自分の灰を山へはこんだ。より明かるい炎をわたしは考えだした。」と述べられている。<sup>3)</sup> つまり、故郷にいた時の30歳までのツァラトウストラは苦悩していたのであり、苦悩している自分を克服して山にはいったのである。同じ章のそれ以前の部分が、その苦悩について語っている。<sup>4)</sup> それによると、苦悩していたツァラトウストラは理想を自分のかなたに投げて神を作り、自分の苦悩から目をそむけ、自己を失うことによって陶酔的快樂に浸っていたのだった。しかし、妄想を人間のかなたに投げたことの誤りを悟り、自分の作った神を殺して、神の死の灰を持って山にはいったのである。そこで10年間、孤独な思索を続け、ついに人間に対する「より明かるい炎」を創造したのである。

第2の部分は、刺激的動機を描いている。ここでは前の部分の記述を受けて、ツァラトウストラが自分の心の変化を説明している。

見よ！わたしは自分の知恵に飽き飽きした。ミツを集めすぎたミツバチのように。――それを受けようと差しをばされる手がなくてはならない。

わたしは贈りを与え、分かち与えたい。人間の中の賢い者がふたたびその愚かさをよるこび、貧しい者がふたたびその豊かさをよるこぶようになるまで。<sup>5)</sup>

このようにツァラトウストラの心は、自分の知恵を人間たちに与えたくなったのである。この人間たちに自分の知恵を与えようとする意志が、以後のツァラトウストラの行動を導き規定する主導的動機である。(実は、この変化は彼の内面の根本的变化に基づいて起こったのであるが、それについては第2節が伝えてくれる。) だが、与えるという行為は受け取る者がいて初めて成立する。照らす者を持たなかったら太陽は自分の光と道と

に飽きてしまったらと、太陽に感情を移入してツァラトゥストラは自己の内面を語っている。自分の知恵を与えたくなくなったツァラトゥストラには、未だそれを与えるべき者が欠けている。それで彼は、自分の知恵に飽き飽きしているのであり、自己の知恵の過剰を吸いとり、その代わりに祝福してくれる人間、受けようと差しのばされる手を必要としているのである。ツァラトゥストラにとって、自分の知恵を「贈ることは止むにやまれぬこと」<sup>6)</sup>なので、受け取ってもらうことは「あまりにも大きすぎる幸福」<sup>7)</sup>であり、「受け取る者が受け取ってくれたことを、与える者の方が感謝しなければならない」<sup>8)</sup>のである。

そのために、わたしは低いところにおりて行かねばならない。なんじが夕方、さらにまた光を下界にもたらすために、海のかなたに沈む時するように！ なんじあふれるばかりに豊かなる天体よ！

わたしは、なんじとひとしく、下って行かねばならない。それを人々は没落と呼ぶ。わたしが下って行く目あてとする人々は。

……………」

——こうしてツァラトゥストラの没落は始まった。<sup>9) 10)</sup>

自分の知恵を与えるために、ツァラトゥストラは人間たちの世界へ降りて行かなくてはならない。それが彼の没落<sup>11)</sup>であり、この没落の開始を描くことがこの第2の部分の主要な機能である。ツァラトゥストラの没落という設定は、作品全体の解明のために極めて重要であるので、ここで没落の終結とツァラトゥストラの知恵について述べておかななくてはならない。この2点に関して、第3部の「快方に向かう人」の章が語っている。

いまわたしは死んで消えて行く、……

……………」

——最大のものにおいても、最小のものにおいても、少しも変わらぬこの同じ生へ、わたしは永遠に再来するのだ、ふたたび一切の事物の永遠回帰を教えるために、——

——ふたたび大いなる地の真昼、人間の真昼という言葉話すために。ふたたび人間たちに超人を告げるために。

わたしはわたしの言葉を語った。わたしはわたしの言葉によってくださる。わたしの永遠の運命がそれを欲するのだ——、告知者としてわたしはほろびるのだ！

没落して行く者がみずからを祝福する時がいまやきた。かくて——ツァラトウストラの没落は終わるのだ。<sup>12)</sup>

このように、ツァラトウストラの死ぬ時に彼の没落は終わるのである。そしてその時、ツァラトウストラは自分の知恵の告知者として死ぬのである。そこから、彼の知恵の告知ということが『ツァラトウストラ』の頂点を形成すると考えてもよいだろう。このこととの関連から、第3～5節におけるツァラトウストラの人間たちへの告知ということは重要な意味を持ってくるのである。序説において語られるツァラトウストラの知恵の中心的内容は超人であるが、作品全体のクライマックスで語られる知恵の内容は、永遠回帰と大いなる真昼と超人の3点であることが、引用した箇所から読み取られるのである。しかも、その中心に置かれているのは、ニーチェ自身述べているように、<sup>13)</sup> 永遠回帰思想である。

## 註

- 1 Friedrich Nietzsche, *Also sprach Zarathustra*, Stuttgart 1969, S. 5.  
以下, “Zarathustra” からの引用はすべてこの版によった。  
なお翻訳は, 高橋健二・秋山英夫両氏の訳(『世界の大思想4・ニーチェ』, 河出書房新社)から, 主に借用させて頂きました。
- 2 序説第1節とほとんど同じものが, 1アフォリズムとしてすでに「楽しい知識」中に収められているが(Nietzsche, *Die fröhliche Wissenschaft*, Stuttgart 1956, S. 232.) 両者の相違は2点のみで, 他は全く同一である。第1点は, 後者において付されていた「悲劇が始まる」という標題が前者においては削除されていることである。この点に関する詳しい考察は稿を改めて行いたい, 当初悲劇的に構想されていた「原ツァラトウストラ」に変更が加えられて「ツァラトウストラ」はもはや悲劇的ではなくなったためではないだろうか。第2点は, 後者において「ウルミ湖」となっていた箇所が前者においては「故郷の湖」に変えられていることである。この変更は, ニーチェが湖に特殊な機能を付与してゆく過程を示してくれている。湖の果たす機能については後に改めて述べたい。
- 3 *Zarathustra*, S. 31.
- 4 *ibid.*, 「背後世界者について」第1～8段落, S. 31.
- 5 *ibid.*, S. 5.
- 6 *ibid.*, S. 247.

- 7 *ibid.*, S. 5.
- 8 *ibid.*, S. 247.
- 9 この第1節の結びの文は、第10節の最後で序説全体の結びの文として再び現れる。つまり、ツァラトウストラの没落の開始が2度語られているわけである。これは決して単なる繰り返しではない。この同じ2文の意味内容の差が、序説の果たす機能を示しているのである。
- 10 *ibid.*, S. 5f..
- 11 *Untergang* という語は、3重の意味内容を持って使用されている。第1には、この箇所で太陽の動きを説明するのに使われているような、高所から低所への下降であり、第2には、第1の用法を比喩的に用いた精神的破滅であり、そして第3には、ツァラトウストラの没落の終結を考慮すれば、第2の用法を拡張し身体的破滅をも含む死への道程を意味している。
- 12 *ibid.*, S. 245f..
- 13 「この人を見よ」の中で、ニーチェは「ツァラトウストラ」について「永遠帰郷の思想というこの作品の根本概念」と語っている。(Nietzsche, *Ecce homo*, Stuttgart 1954, S. 370.)

## II

第2節は上昇（*Steigerung*）である。この節は、ツァラトウストラと森の聖者との対話の様子を記している。

森の聖者は食物を捜すため自分の住む小屋から森の中に出て来たのだが、突然ツァラトウストラに出会い、一瞬にして彼の没落への意志を察知して、感情の昂るまま没落に伴う危険を告げ、ツァラトウストラの没落に対して疑問を発している。聖者がツァラトウストラに向かって語った言葉のうち、第1段落と第3段落とが実は独言であること<sup>1)</sup>が、聖者の昂奮を我々に告げている。森の聖者もかつては、今のツァラトウストラと同じく、人間を愛した。そして彼もまた、人間に贈り物を与えようとした。しかし、人間は彼に対して疑い深く、彼のあまりにもはなはだしい愛は受け入れられなかった。それどころか、彼は「放火者の罰」を受けそうになったのであろう。そこで彼は人間に絶望し人間への愛を捨てて、森と荒地の中にはいり、愛を神に向けているのである。すでに自分で人間に贈り物を与えようとしたことがあったからこそ、聖者はツァラトウストラの没落へ

の意志を即座に見抜くことができ、それに伴う障害と危険をかつて身をもって体験したことがあればこそ、自己の後に続く者としてのツァラトストラに話しかけ、尋ねずにはいられなかったのである。聖者が真にツァラトストラに向かって発した最初の言葉が、「きょうはみずからの火を谷にはこぼうとするのか。あなたは放火者の罰をおそれないのか。」という唐突な問いであったということが、そのことを示している。

ツァラトストラは森の聖者の先の問いに対して直接答えないで、「わたしは人間を愛する。」とだけ語っている。この言葉は、聖者の問いに対する答えとしては的はずれという印象を読者に与えるのであるが、ツァラトストラのこの言葉を契機として展開される両者の対話を通じて、ツァラトストラの愛と、それと没落の関係とが明らかにされる。人間に対して絶望している森の聖者は、「人間には何ひとつ与えるな。」と、ツァラトストラに勧めている。そして更に、「人間から何かを奪い取れ、そしてそれを彼らとともにになえ」と、人間に対してははなはだしい愛ではなく、愛の「施し物」、すなわち同情を与えるように勧めている。ところが、ツァラトストラは聖者の勧めを拒絶し、自分が与えようとするのは同情よりもはるかに豊かな愛であることを述べる。この箇所では、聖者の勧める同情とツァラトストラの豊かな愛との相違が、はっきりと述べられている。ツァラトストラの愛がどのようなものであるのか、それについて第2部の「同情者たちについて」の章が語っている。

大きな愛はすべてこういう。大きな愛は許すことも同情することも克服する。

……

同情に対して警戒せよ……

すべての大きな愛はすべての同情の上にある。なぜならば、大いなる愛は、愛されるものを——創造しようとするからである！<sup>2)</sup>

このように、ツァラトストラの愛とは、同情を克服した愛されるものを創造しようとする大いなる愛である。そして、ツァラトストラが大いなる愛に到達したということ、換言すれば、人間を愛するようになったということが、第1節で語られたツァラトストラの根本的变化だったので

ある。そして、人間を愛するがゆえにツァラトゥストラは彼らのところへと没落するのであるから、大いなる愛が彼の没落の根本的動機なのである。一読的はずれの印象を与えたツァラトゥストラの答えは、聖者の問いの本質に対する彼の本質的返答であって正鵠を得たものだったのである。しかし同時にその返答は、的はずれという印象を与えることから明らかになるように、没落へ猛進するツァラトゥストラの向こう見ずな姿勢をも示している。

森の聖者はツァラトゥストラの没落への意志が固いことを認めると、親切に忠告を与えている。人間たちの隠者に対する不信を知っている彼は、「彼らがあなたの宝を受けるように心せよ！」と勧めている。その前の箇所でも彼は、人間たちに施し物を与えるなら、「彼らをしてそれをこいもとめさせよ！」と、やはり現実的な忠告を行っている。ここには、没落への意志に燃えるツァラトゥストラと冷静な聖者という対照が読み取られる。森の聖者は、ツァラトゥストラの没落に伴う障害、敵対者の存在をツァラトゥストラと読者に予告するという機能を果たしているのである。<sup>3)</sup> この点から見れば、聖者は没落するツァラトゥストラの先行者である。だが、自分の知恵を人間たちに贈与することしか念頭にないツァラトゥストラは、聖者の忠告に耳を傾けない。

前述したように、ツァラトゥストラはかつて苦悩から神を創りその神を信じたが、やがて苦悩する自分に打ち勝った時、その神は死んでしまった。そこで彼は神の死の灰を山へ運び、古い神に代わるものを求めて10年間思索を重ねた末、人間を愛するようになったのであった。一方聖者は、かつては人間を愛していたが人間に絶望してしまい、今も人間を愛したいという欲求を心の底では燃やしながらも、人間の代償として動物と交わり、人間への愛の代償として神への愛に生きている。この点から見れば、没落するツァラトゥストラにとって聖者は挫折者であり失敗者である。そこでツァラトゥストラは、「あなたから何ひとつ奪うことのないように」と言って人間に対する聖者の絶望を警戒しているのであり、人間に対する希望を説くツァラトゥストラが人間に絶望している聖者に贈るものは何もないので

ある。このように両者の間には、決定的な対立（森の聖者＝人間への愛→神への愛：ツァラトウストラ＝神への愛→人間への愛）が認められる。また老人（森の聖者）と壮者（ツァラトウストラ）という表現にも、両者の対照が表されている。つまり、森の聖者はツァラトウストラの反対者(An-tithese)であり、没落するツァラトウストラにとって失敗した先行者なのである。森の聖者は神の死を知らないと最後に告げられることにより、それまで劣勢であった没落の障害を顧みないツァラトウストラの立場が一挙に浮上して、両者の対立する主張は強い緊張を引き起こし葛藤を高めて、次節へと続くのである。

#### 註

- 1 この聖者はツァラトウストラを第2段落では du と呼んでいるのに、第1段落と第3段落では er と呼んでいる。
- 2 Zarathustra, S. 95f..
- 3 ツァラトウストラの敵対者については第8節において道化師が語り、第9節においてツァラトウストラも自覚するにいたる。

### Ⅲ

第3・4・5節は頂点（Höhepunkt）を形成している。前述したように、ツァラトウストラの没落ということが序説の主題である。そして没落とは彼の知恵を贈与することであるから、市場に集まった人間たちに対するツァラトウストラの知恵の告知は決定的な出来事である。

まず第3節は、直接超人について語っている。超人とは、神が死んでしまった後、人間が自己を克服して目指すべき大地の意義であり、人間の善のみならず悪をも摂取した海のような存在である。

ほんとに、人間はけがれた川である。不潔になることなく、けがれた川を受け入れうるためには、海でなければならない。

さあ、わたしはきみたちに超人を教える。超人こそそのような海だ。その中ではきみたちの大きなけいべつは没し去ることができる。<sup>1)</sup>

ここで超人が海に喩えられているが、この比喩は重要な構造的意味を持っている。すなわち、この比喩に基づいて湖・沼といった自然にさまざま



な機能が付されているのである。第2部の「鏡を持った子供」の章には、次のような一段がある。

たしかにわたしの中には湖がある。隠者的な自足した湖だ。だが、わたしの愛の激流がこの湖を流し落とす——海へ！<sup>2)</sup>

ツァラトゥストラの大いなる愛は、彼の内面の湖から流れ出て超人という海へ流れ込むと言われているが、ここでは湖に、ツァラトゥストラの愛という澄んだ水を湛えた場所、つまり彼の魂の比喩という機能が与えられていることに注意したい。<sup>3)</sup> 同様に、第1節の冒頭で述べられた湖も同じ機能を担っているのである。その時ツァラトゥストラは単に故郷を去っただけではなく、自分の古い魂をも捨てたのであった。つまり、そこで彼の魂の第1の変化が描かれていたのである。従って、第1節の第2段落以下が述べているのは彼の魂の第2の変化である。そして、この2つの変化によって区切られた3段階が、言説の最初の章「3つの変化について」において示される3段階の各に相応するのである。この作品は、ツァラトゥストラが第3段階に達したところから始まっているのである。そこで、「ツァラトゥストラは変わった。ツァラトゥストラは子供になった。」という森の聖者の言葉も頷かれるのである。ツァラトゥストラの魂としての湖、超人の魂としての海とは対照的に、第8節の沼が、森の老人の陰湿な魂を表現している。これらと関連して、森は、第2節及び第8節において、聖者及び老人の魂の荒れはてた面を表現している。<sup>4)</sup>

第3節では、第17～22段落が超人について語りながら、大いなる軽蔑の時として大いなる真昼を暗に示していることを指摘しておきたい。第1部の最終章「贈与する徳について」において、「大いなる真昼とは、人間が動物と超人との間にあって軌道のまん中に立ち、夕べへの道を最高の希望として祝う時である。」<sup>5)</sup>と、語られるのであるが、すでにこの箇所、超人と大いなる真昼との関連性が示されている。

第4節はツァラトゥストラの愛する者たちについて語っているのだが、第2・3段落において、まず、危険な人間存在が「動物と超人との間」の

「深淵の上に張りわたされた綱」に喩えられている。このことは、第6節における綱渡り師の墜落に重要な機能を与えるための伏線となっている。次の第4段落は第4節の核心であって、第5段落以下はこの段落の内容を敷衍したものである。第4段落の第1文はツァラトゥストラの大いなる愛を人間の偉大さとして述べたものであり、第2文はそれを分析的に説明したものである。大いなる愛とは、超人を創造しようとする意欲であった。ツァラトゥストラは、同じ意欲を持つ人間を愛する。そのような同じ意欲を持つ偉大な人間たちの力によって、人類は全体として少しずつ超人へと渡って行くのである。しかし個人の次元で見れば、それはひとりひとりの人間が大いなる愛のために滅びることである。それ故、「人間は1つの過渡であり、没落」なのである。つまり、ツァラトゥストラは人類のために自己を犠牲にする者たちを愛するのである。これはツァラトゥストラ自身の本質でもあり、また第9節で語られる彼の道連れの本質でもある。

最後に第5節では、末人について語られている。末人とは、「自分自身をもはやけいべつすることのできない人間」である。自分よりも高い存在を愛するために自分を軽蔑するのであるから、末人は自分よりも高い存在を愛せない人間、自己を克服しようとしめない人間、すなわち大いなる愛を持たない人間であるので、ツァラトゥストラにとっては「もっともけいべつすべき人間」なのである。

ツァラトゥストラは市場に集まった民衆に向かって3度語りかけ、3度とも拒絶される。彼が最初語り終えた時、民衆のうちの1人が、「おれたちは綱渡り師についてはもう聞きあきた。さあ、見せてくれ！」と叫んで、彼の教説を鋭く皮肉っているが、この言葉はツァラトゥストラに対する民衆の嘲笑を集約的に表現している。そして2度目に語り終えた後、ツァラトゥストラは民衆に理解されないことを感じながらも、話し方を変え民衆の誇りに訴えようとして3たび語る。だが彼の期待は打ち砕かれ、最も軽蔑すべき末人を自分たちに与えてくれるように民衆が熱望するという極めて皮肉な結果に終わり、ツァラトゥストラは自分が民衆には全く理解されないことを痛感するのである。このようにしてツァラトゥストラの魂は、

自分の知恵を人間に告知するという最高に充実した状態から、棄捐され憎悪されるという最低の打ち拉がれた状態へと急激に転落してしまったのである。

#### 註

- 1 Zarathustra, S. 9.
- 2 *ibid.*, S. 88.
- 3 魂 (Seele) と湖 (See) とは、古くから密接な関連を持っている。魂の語源を原始ゲルマン語まで溯れば、「湖に由来し、湖に属するもの」の意になる。また、特定の湖はゲルマン人にとって、生前および死後の魂の居所であると見なされていたという。s. Friedrich Kluge, *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache* 20. Auflage, Berlin 1967, S. 697.
- 4 森 (Wald) という語は、古高ドイツ語では荒地をも意味し、中高ドイツ語でも荒地という副次的意味が強く現れていたという。s. Kluge, *ibid.*, S. 833.
- 5 Zarathustra, S. 84.

#### IV

第6・7・8節は降下 (Fallen) であり、第6節の第1段落が悲劇的動機を描いている。

綱渡り師の墜落は、予期されることなく突然生起した悲しく恐ろしい事件であるが、それにも拘わらず、前の部分で描かれたツァラトゥストラの棄背ということを思い合わせれば、この事件が彼の内面と深く照応していることが判る。第4節始めの比喩によって、ここに描かれている二つの塔にはそれぞれ動物と超人の比喩という機能が与えられており、その間に張られた綱には人類の比喩という機能が付与されている。それ故、この綱を前方の塔に向かって渡って行く綱渡り師、「危険をもって、自分の天職」としている綱渡り師は、超人へと渡って行く危険な生を説くツァラトゥストラの比喩でありうる。そこで綱渡り師の墜落は、ツァラトゥストラの内面の急激な転落を可視的なものにし視覚に訴えることによって、印象的に表現したものであると言うことができる。この綱渡り師の墜落ということが、悲劇的動機である。

ところで、第1部の「市場の蠅について」の章では、道化師とは民衆が

誇りとする「偉い人々」であり、「民衆にとっての時の支配者である」と語られている。<sup>1)</sup> その章ではまた、道化師は「精神の良心をほとんど」持たず、それ故「速い感覚」を持ち、「ひとの気を転倒させること」が「彼にとっては証明することを意味する」とも、「時が支配者たちをせきたてる。それで支配者たちはきみ（＝ツァラトゥストラの弟子）をせきたてる。」とも語られている。<sup>1)</sup> また第3部の「古い板と新しい板について」の章では、「克服にはいろいろの道と方法とがある。それはおまえが自分でやることだ！だが、『人間はまた飛びこされることもある』と考えるのは、道化師だけだ。』<sup>2)</sup>と語られている。このように、道化師とは民衆を精神的に支配している者たちの比喩なのである。この節において、道化師は確かに「速い足どりで」綱渡り師の後を追い、恐ろしい声で叫びながら綱渡り師をせきたてている。そして、道化師に飛び越されると、綱渡り師は「あわてふためいて、綱を踏みはずし」墜落している。この情景は、現在の支配者が民衆を支配できる時間は最早短くなり、時がせきたてるので、彼は急ぐことなく歩む競争相手の気を転倒させ勝とうとして飛び越したことを意味している。つまり、この情景は第1に、未だ知られざる敵によってツァラトゥストラが打ち負かされたことを語っているのである。

しかし、この情景が我々に語っているのはそれだけではない。第9節においてツァラトゥストラは、没落する対象を自分の手でまず育てねばならないことを発見するのであるが（後出箇所参照）、そのためには十分な時間の経過が必要である。ツァラトゥストラが自己の知恵を告知する最後の没落の時の到来ということは、第4部の主要な主題として扱われている。<sup>3)</sup> ツァラトゥストラの知恵が受け入れられるようになる時は、第4部の後初めてやって来るのであるから、序説のこの時点で人間たちに知恵を告げることは早すぎたのであった。それ故、彼は民衆に理解されなかったのである。<sup>4)</sup> 換言すれば、没落への激しい意志のためツァラトゥストラは自分自身をせきたてたのである。その意味で、ニーチェ自身遺稿の中で語っているように、「ツァラトゥストラ自身が道化師なのである、哀れな綱渡り師を飛び越した道化師なのである」。従って第2にこの情景は、ツァラトゥ

ストラがツァラトゥストラ自身によって飛び越されるという意味で、ニーチェの「自分への嘲笑」である。このように、ここにはニーチェのイロニーが強く現れている。そして、ツァラトゥストラも彼の敵とともにニーチェの分身であって、彼の内面での思想的戦いがここに描かれているのである。

すぐ前に述べたように、綱渡り師は危険な生を生きているという点から、ツァラトゥストラの比喩となっているのだが、両者の間にはもちろん、本質的相違がある。「わたしはむちとわずかなえさで踊りを教えこまれた動物以上のものではない。」と自ら語っているように、綱渡り師は受動的存在であって、危険な職業に携わっているのも他からの強制によるのであり、彼の没落も道化師によってもたらされたものである。その点において綱渡り師と、主体的に危険な生を生き超人のために没落しようとするツァラトゥストラとは決定的に相違するのである。（この綱渡り師は、序説において重要な役割を与えられている人物の中で、唯一人の平凡な人間である。その他の人物、すなわち、ツァラトゥストラ、森の聖者、道化師、墓掘り人、森の老人は皆、一廉の人物なのであるから。）しかし、民衆によって自己の愛を拒絶され棄捐されて打ち拉がれたツァラトゥストラは、危険な生に生き自己の天職によって滅びかけているという似かよった運命のために、綱渡り師に同情してしまい、彼の死体を自分の手で葬ろうとするのである。前に引用したように、「同情に対して警戒せよ。」とツァラトゥストラは戒めているのであるが、その彼が同情に支配されるとはどういうことなのか。このことについては、第9節のところで論じたい。

第8節において、道化師はツァラトゥストラに次のように語っている。

ここではあまりに多くのものがきみを憎んでいる。善い人も正しい人もきみを憎んでいる。彼らはきみを自分たちの敵、自分たちをけいべつするものと呼んでいる。正しい信仰の信者もきみを憎み、きみを大衆の危険と呼んでいる。ひとがきみを笑ったのは、幸運であった。まったく、きみは道化師のように話した。きみがかの死んだ犬の道連れとなったのは、幸運であった。そんなにまで卑屈になったので、きょうのところ、きみは助かったのだ。だが、この町から去れ——さもないと、あすはわたしがきみを飛びこすだろう。生きたものとして、死んだものの上

を。<sup>5)</sup>

道化師はまず、善い人、正しい人、正しい信仰の信者のツァラトゥストラに対する憎しみを告げている。彼らがツァラトゥストラを憎む理由は、第9節において語られるのであるが、彼らこそ道化師によって比喩的に表現されている当の者たちであり、ツァラトゥストラの没落に敵対する者たちである。この箇所ですべて初めてツァラトゥストラの没落に敵対する勢力の正体ははっきりと知らされるのである。そしてツァラトゥストラは、反対勢力の強さだけでなくその存在さえ自覚することなくして、その力によって完全に打ち負かされてしまったのであった。道化師は更に、ツァラトゥストラが町から去らなければ、自分が殺してしまうと言っている。これが、森の聖者の語った「放火者の罰」だったのである。しかし、道化師のように話したことで、綱渡り師の死体の道連れとなったことが、彼らの目にはひじょうに卑屈に映ったので、ツァラトゥストラは辛うじて「放火者の罰」を免れ、生き延びることができたのである。

第8節の第2段落では、ツァラトゥストラの敗北した姿が描かれている。綱渡り師の死体を担いだツァラトゥストラは、墓掘り人たちによって嘲笑されるのである。この墓掘り人たちは、アウグスト・メッサーによれば、歴史学者を意味しているというが、<sup>6)</sup> 構造的には先の道化師と同様、民衆支配者のツァラトゥストラに対する憎しみを表現しているのである。

ツァラトゥストラは森と沼の中で飢えに襲われる。「自分の飢えには奇妙なむら気がある。しばしばそれは食後に初めてやってくる。」と語られているところから判明するように、彼の飢えは肉体的なものと精神的なものとの二重の飢えである。彼の精神的な飢えは、その日人間たちから受けた苦い体験に起因するものである。力を回復させてくれる食物と飲物を求めて、ツァラトゥストラは明かりの点っている一軒家の戸をたたく。明かりを下げた出て来た老人は、メッサーの指摘するように、哲学者なのである。<sup>7)</sup> この老人は、ツァラトゥストラと彼の道連れに食物と飲物を与えようと持ってくるが、道連れが死んでいることを知らされると、「それは

わしの知ったことではない」と言って不きげんになる。ここで重要なのは、この老人がツァラトゥストラの精神的な飢えを満たせないことだけではない。贈り物を死体に与えようとして受け取られず気分を害したこの老人は、やはり贈り物を人間たちに与えようとして拒絶され打ち砕かれているツァラトゥストラのパロディーなのである。老人が死体に飲み食いさせようとしても不可能なように、ツァラトゥストラが突然人間たちに自己の知恵を与えようとしたのも押しつけであり、しよせん無理なことだったのである。この部分は前に描かれたツァラトゥストラの棄捐を説明するものであり、また同時に、第9節における突然の真理の発現を内的に準備するものでもある。

#### 註

- 1 Zarathustra, S. 54f..
- 2 *ibid.*, S. 220.
- 3 拙論「『ツァラトゥストラ』第4部の構造に関する試論」参照，中京大学教養論叢第17巻第2号，1976年，S. 107～124. また第3部の「古い板と新しい板について」の章の第1節でツァラトゥストラが次のように嘆いている。  
     いつわたしの時はくるのか？  
     —わたしの下降の時，没落の時は？ なぜならわたしはもう一度，人間たちのところへ行こうと欲するからだ。 *ibid.*, S. 217.
- 4 この情景は，ハイデッガーの引用で有名になった「楽しい知識」中の「狂気の人間」と題されたアフォリズム第125番 (Nietzsche, *Die fröhliche Wissenschaft*, Stuttgart 1956, S. 140f..) において断片的に述べられた考えが，形を変えて序説の中に組み込まれたものではなかろうか。
- 5 *ibid.*, S. 18.
- 6 August Messer, *Erläuterungen zu Nietzsches Zarathustra*, Stuttgart 1922, S. 16.
- 7 Messer, *ibid.*, S. 17.

#### V

第9・10節は序説の段落 (Katastrophe) である。この部分は、翌日の真昼頃、ツァラトゥストラの発見した新しい真理を中心にして構成されているのだが、それについて述べる前に、ここに描かれている眠りの機能

についてまず論じたい。

ツァラトウストラは市場での事件があった日の翌日、目覚めるとすぐ新しい真理を発見するのであるが、この真理の発現は決して脈絡のない「機械仕掛けの神」ではない。市場での最初の説教の中ですでにツァラトウストラは魂と肉体について語っているが、<sup>1)</sup>第1部の「肉体の軽蔑者について」の章では、「肉体は1つの偉大な理性」であり、「自我の支配者でもある」と語られている。<sup>2)</sup>また、「魂は肉体に属するあるものを表す言葉にすぎない」とも、「きみのささやかな理性を、きみは精神と呼ぶが、それも実は肉体の道具にすぎない」とも言われている。<sup>2)</sup>つまり、精神も魂も肉体によって支配されると言われているのである。ところでツァラトウストラは、前日の朝住みなれた洞穴を去り、歩いて山を下り、森を抜け、最寄りの町に行って酷しい傷手を蒙り、それから更に何時間も森の中を歩いた後、やっと次の日の「朝が白みかけたころ」眠り込んだのであった、「肉体は疲れ、魂はじっと動かずに」。このようにツァラトウストラの肉体は前日一日中、昼も夜も盛んに活動を続けたのであったが、実はそれに伴って次第に疲労が募っていたのである。そして更に、綱渡り師の死体を自分の手で埋葬しようという同情が彼の心を支配して行動させていたことから明きらかになるように、ツァラトウストラの肉体の偉大な理性の力もそれに伴って弱まっていたのである。それ故、肉体の偉大な理性の力を受けることなく、傷手を負った彼の精神が自己の飢えを満たすことはできず、また真理が発現することもなかったのである。しかし十分な眠りを取って偉大な理性の力を取り戻したツァラトウストラの肉体は、自己の道具である精神と魂に対してその支配力を振るい始めたのである。そしてツァラトウストラは再び平常の統一された存在に帰ったのである。目覚めた時の彼のいぶかしさが、眠る前と眠った後の彼の内面状態の大きな相違を物語っている。真理の発現は、肉体の持つ偉大な理性の働きによるのである。つまり眠りは、直接ツァラトウストラの肉体を回復させるだけでなく、彼の精神と魂をも回復させるという機能を持っているのである。<sup>3)</sup>

次に、一日の時刻とツァラトウストラの気分の関係について論じようと



思うが、この両者の関係は、今述べた肉体による精神と魂の支配という考えに基づいて構成されているのである。肉体が統一体としての活動力を最も高め支配力を最も強めるのは睡眠後であるから、大抵は朝である。それ故「ツァラトウストラ」では、ツァラトウストラが新しく行動を開始しようとする部分、すなわち、序説の始め、第2部の始め、第4部の始めと終わりは皆、朝である。真昼は、大いなる真昼との関連から、特別な意味を与えられており、昂揚した時刻であるか、ツァラトウストラが決定的な行動を行う時である。序説第3～5節、第4部の「真昼時」の章が、そうである。さて、序説のこの部分は、その構造上の特殊性を反映して、工夫の凝らされた設定となっている。この部分は、序説の内部的構造から見れば結末部であり、没落という主題に一応の解決を与える真理の発見の時刻であるので真昼である。だが、「ツァラトウストラ」の全体的構造から見れば、この部分を含めた序説全部が、ツァラトウストラの新しい活動を示す発端部であるので、睡眠直後という設定なのである。つまり、終結部であると同時に開始部でもあるこの部分は、昼と朝との二重の気分を持つように描かれているのである。

さて、いよいよツァラトウストラの発見した新しい真理について論じたいが、第9節の第2段落以下がそれについて語っている。

まず始めの2段落（第9節の第2・3段落）は、ツァラトウストラに生きた道連れが必要なことを語っているが、これは、彼が死体と別れること、死んだ道連れから自己を解放することと表裏の関係にある。すなわち、すぐ前で述べたように、偉大な理性の働きによってツァラトウストラの魂は大いなる愛を取り戻し、綱渡り師に対する同情を克服して、本来の行動、没落へと再度赴こうとしているのである。生きた道連れは、ツァラトウストラの没落のために必要なのである。次の3段落（第9節の第4・5・6段落）が序説全体の核心であって、ツァラトウストラの発見した真理の内容を語っている。すなわち、自分を理解しない民衆に向かって語るのは無駄なことだと彼は認識したのである。だから、二度と民衆に向かって話そうとしないのであり、家畜の群れの牧人になろうとはせず、死体だけでな

く民衆をも相手にしないで飛び越えて行くのである。その代わりに、ツァラトウストラは畜群から数匹を誘い去る。ところが、それに対しては障害がある。そうすることによって彼は、彼らの牧人から盗賊と罵られるからである。すなわち、第8節において道化師が語ったように、民衆の支配者である善い人、正しい人、正しい信仰の信者は、自分たちの価値の板を破り裂き、超人という新しい人間を創造しようとするツァラトウストラを、破壊者、犯罪者と称して最も憎むからである。<sup>4)</sup> 彼らから苦い体験を嘗めさせられた後になって初めて、この箇所ではツァラトウストラは、自己の没落に敵対する勢力の存在を自覚するのであり、それを踏まえた上で、民衆の中から少数の者を離脱させ、彼ら「ひとりで生きる人たち」だけに向かって今後語ろうとするのである。それがツァラトウストラの新しい没落であり、民衆全体をではなく民衆の中の少数者だけを相手にするという没落する対象の変更が、彼の発見した真理の内容である。そのことがまた、序説全体を通して描かれたこれまでの没落の解決を提示することにもなっている。

ところで、ツァラトウストラの道連れとは、おのれみずからに従うことを欲するがゆえに彼に従ってくる、そして彼の行かんとするところから従ってくる人々、また、新しい価値を共に創造し共に収穫し共に祝う人々であると語られているが、これから彼の語りかけようとしている民衆の中の少数者が、そのまま彼の道連れであるのではない。というのは、第3部の「不本意な幸福について」の章には次のように書かれているからである。

創造者はかつて道連れと、自分の希望の子供を求めた。そして、見よ、創造者は、みずからまずそれを創造しないかぎり、見だしえないことがわかった。

こうしてわたしは、わたしの子供たちのもとに行き、また彼らのところから戻りつつ、わたしの事業のさなかにいる。<sup>5)</sup>

ここに引用した箇所は、ツァラトウストラが発見した真理のうち、序説では語られなかった重要な内容を述べている。すなわちツァラトウストラは、自己の道連れを自分で創造しなければならないのである。言い換えれば彼は、民衆の中の少数者を自己の道連れにまで育て上げなければならない

いのである。そこで以後のツァラトゥストラには、道連れの育成ということが事業の一部として加わるのであり、そのために彼は以後の教説を語るなのである。

次に、第10節において描かれている情景について論じよう。まず正午の空を一羽の鷲が広い円を描いて飛んでおり、鷲の首には一匹の蛇がからみついていたという情景が、ハイデッガーの指摘するように、永遠回帰を暗示していることだけ述べておきたい。<sup>6)</sup> すでに第3節において超人が主題として語られ、その際大いなる真昼が暗示されていたのであるから、この箇所での永遠回帰の暗示を加えると、ツァラトゥストラの知恵の内容を構成する3つの重要概念のすべてが、序説において触れられているわけである。これは意味のないことではないだろう。

さて、この箇所ではっきり述べられているように、ツァラトゥストラを捜しにやって来た鷲と蛇は、ともに彼の属性の比喩である。すなわち、太陽のよりの最も誇り高い動物である鷲はツァラトゥストラの誇りを表わし、また太陽のよりの最も賢い動物である蛇はツァラトゥストラの賢さを表わしている。先に彼の誇りについて論じよう。第5節において、ツァラトゥストラの誇りと対照的に、民衆の誇りは彼らの教養であることが述べられていた。<sup>7)</sup> そして第2部の「教養の国について」の章は、民衆の教養とはさまざまなものの寄せ集めであり、彼らの仮面であって、それ故彼らを貧しくさせ「生まずめ」にしているものであると語っている。<sup>8)</sup> ツァラトゥストラの誇りとは、民衆の誇りに対抗しそれを超えるものであるから、従って、唯一の実質的な豊かな創造的なもの、つまり大いなる愛であり、没落への意志に外ならない。そこで判明するのだが、第6～8節におけるツァラトゥストラは、単に卑屈に見えただけではなかったのである。彼は綱渡り師への同情に駆られて、自己の誇りである没落への意志を投げ出していたのであるから、道化師の語ったようにツァラトゥストラはその時、実際卑屈であったと言ってもよいだろう。次にツァラトゥストラの賢さについてであるが、その対立概念である彼の愚かさについて、特に序説における彼の愚かさについて、第4部の「より高い人間について」の章が語っ

ている。

わたしが初めて人間たちのもとへ行った時、わたしは隠者の悪行、大いなる悪行をやらかした。わたしは市場に立ったのだ。

そして、わたしがすべての人に向かって語った時、わたしはだれにも語らなかったのだ。<sup>9)</sup>

ツァラトウストラの愚かさとは、市場で万人に向かって話しかけたことであると言われている。それは、民衆は誰もツァラトウストラを理解せず、結果として彼は誰に対しても話しかけたことにならなかったからである。自己を理解しない者に話しかけたからである。つまり彼の愚かさとは、自己の知恵を受け取るのに適切でない者に贈ろうとしたことである。従って彼の賢さとは、自己の知恵を適切な者に与えようとする事、つまり、適切な対象に向かって没落を行おうとする意志である。このことは、ツァラトウストラが森の聖者の言葉を思い出して、ため息して、「もっと賢くなりたいものだ」と嘆いているところからも明きらかにされる。なぜなら、第2節において森の聖者は、市場の人間たちがツァラトウストラに対して疑い深く、彼が贈り物を与えるために来たことを信じないだろうと忠告していたからである。このように、鷲は没落への意志というツァラトウストラの誇りの比喩であり、蛇は没落を適切な者に対して行おうとする彼の賢さの比喩である。

更に、終わりの部分でツァラトウストラは、賢さを失うことがあっても誇りだけは自分から離れないようにと願っている。このように、彼の誇りが中心的属性であり、彼の賢さは副次的属性なのである。言い換えれば、ここでツァラトウストラは、自己の知恵を不適切な者に与えようとする事があっても、没落への意志だけは持ち続けようとしているのである。<sup>10)</sup>

——こうしてツァラトウストラの没落ははじまった。<sup>11)</sup>

#### 註

1 Zarathustra, 序説第3節第12～14段落S. 9.

2 ibid., S. 34f..

3 この眠りの機能は第4部においても発揮されている。より高い人間を捜して一

- 日中山の中を歩き回って疲れたツァラトゥストラは、その日のうちはより高い人間への同情を克服できないが、十分な睡眠を取った翌朝、その同情を克服する。
- 4 言説の最初の章「3つの変化について」において (ibid., S. 25f..) 描かれている「なんじなすべし」という千年の価値をうるこの1つ1つに輝かせた「あらゆる竜の中で最も強大な竜」は、彼らの本質の比喻である。
  - 5 ibid., S. 177.
  - 6 マルティン・ハイデッガー (崗田宗人訳), 「ニーチェ」第1巻, 白水社, S. 310f..
  - 7 ibid., S. 13.
  - 8 ibid., S. 129ff..
  - 9 ibid., S. 317.
  - 10 この言葉通り第4部においてツァラトゥストラは賢さを失い、誇りもまた失いかけるのである。
  - 11 ibid., S. 22. この文は第1節の結びにも用いられていた。しかし、以上述べてきたところから明きらかになったように、没落の意味するところにおいて、この2文の間には大きな相違があるのである。

## VI

以上述べてきたように、序説は、まず人間たちへのツァラトゥストラの没落という主題を提示し (第1節), 次に没落に対する反対者が登場して葛藤が高められ (第2節), ツァラトゥストラの知恵の告知という決定的事件が起こって頂点に達する (第3・4・5節), しかし彼は棄背されて苦悩するが (第6・7・8節), 真理の発見により一応の解決が与えられてそれまでの没落は終わる (第9・10節), という戯曲的内部構造を持っているのである。また、「ツァラトゥストラ」の全体構造的には、民衆全体に向かってではなく、自己の道連れに向かってのツァラトゥストラの没落という主題を提示する機能を果たしている。